

小説集

海への時間

飯島耕一



小説集

海への時間

飯島耕一



読売新聞社

小説集 海への時間 うみへのじかん

定価 一三〇〇円

第一刷 昭和五十二年一月二十日

著者 飯島耕一 いじまこういち

編集人 笠井晴信

発行人 二宮信親

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町一―七―(郵便番号一〇〇

大阪市北区野崎町七七郵便番号五三〇

北九州市小倉北区明和町一―一―郵便番号八〇二

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 寿製本株式会社

© Koichi Ijima, 1977

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

海への時間

装帧 || 西脇順三郎 + 多田進

息つきの話 5

海への時間 47

重か、ばい？ 93

海の夜のなかで 143

息つぎの話

息つき島の本役場の大浦さんはどうしているだろうか。

去年の十月、息つき島で大浦さんに会った。

息つき島で文字どおり大きく息をひとつついたことが思い出される。

それにしても、この国の西の端の端の息つき島へなぜ渡ったのだろうか。

すべて平賀源内のみちびきによる。

そのひとつ前をたぐれば「ミラボー橋」のアポリネールの手が、生へのなつかしさをこめてひらめいているのが見える。

数年前、わたしはアポリネールの足跡を追っていた。わたしはいかなる情熱にそそられてか、この多分に山師的だが、実は文明の未来をするべく予見した予言者の歩いた跡と、この詩人の魂の状態でともいふべきものの底のところをつきとめようとしていた。第一次大戦で負傷し、頭を白い繻帯でぐるぐる巻きにしたこの詩人は、わたしには非常に親しいものとなっていた。

この国でアポリネール型の人物は誰だろうか、というのがわたしの第二の問いだった。
平賀源内という名がこうしてわたしのところにやってきた。

わたしはいま、フランスのパリ、第五区、ゲイ・リュサック街十二番地の「アンリ四世ホテル」というところにいるが、このホテルは「海辺の墓地」のポール・ヴァレリーが、故郷の地中海沿岸セートの町からパリに出てきたとき、数年間住んだといういわくつきの家である。

わたしはヴァレリーについて知るところの少ない者だ。わたしはかえってヴァレリーの対立者に魅かれてきた。しかしどういふ因縁か、パリに着くや否や飛びこんだのがこのホテルであり、ホテルを経営するヴィシャル夫人と、その母親の八十六歳の老女にも気に入られてしまい、二ヵ月半という時間がたった。

わたしといえども夕暮れの無為のときなど、海の彼方の故国のことを物悲しく思い出すことがあるが、そのようなとき、この旅宿の、小さな木の椅子に坐ったわたしには、不思議なことにあの太

都会東京ではなく、あの西の端の端の、日本でもヨーロッパに一番近い息つき島のたたずまいが、もったもありありと見えてくるのであった。

こういうわけで、手もとにはただ一つの資料もない。ひたすら記憶によって、わたしがどうしても息つき島を知るにいたったかを辿ってみたいのが、この書きもののモチーフである。

わたしはともかく平賀源内にただならぬ関心を抱いた。この論証にもいまは手を出すことができない。読者に信じてもらう以外にない。わたしは図書館で、源内にかかわる資料なら何であらうとむさぼるように読んだ。

そこでわたしがもっともつよく魅きつけられたのは、源内が東北の秋田へ旅をしていることである。秋田はまたわたしに因縁浅くない地であり、わたしの両親も、祖父母も、その以前もすべて秋田の生れであり、その前は常陸水戸から藩主の佐竹氏が左遷されたときに、みちのくへとつき従った者の一人だった。わたしは南の瀬戸内海沿岸の生れだが、こうして秋田はわたしに親しく、少年時から、しょつたる鍋や、納豆や、ハタハタ鮨に味覚のたのしみを経験してきた。

同じ瀬戸内の沿岸、四国高松近郊の志度生れの源内が、秋田に旅をしているという事実は、かくて十分にわたしの好奇心をそそる。

源内は鉱山技師でもあった。いや、鉱山開発こそ彼の本職だったかも知れない。秋田の鉱山と言

えば銅山である。今から二百年前、秋田の銅山は疲弊していて、その上幕府からの取立てもきびしかった。時の藩主は佐竹義敦である。

佐竹義敦は、鉱山技師である平賀源内と吉田理兵衛に目をつけた。この吉田理兵衛の身もとについてわたしは調査していたが、いまはつまびらかにしない。しかしこの時代の歴史家ならずべて吉田理兵衛の名は知っているだろうというほどに、理兵衛は、とくに銀絞の法には通じていた。

平賀源内はもとより自力で、自分の発見した鉱山の開発をしたい。しかしそれには資金が要る。

彼には佐竹藩の依頼に応じない理由はない。佐竹藩の案内役を先立てて、源内は吉田理兵衛とともに秋田へと向った。わたしの記憶にあやまりがなければ、たしか七月に、一行は秋田の奥の角館かくのだてに着いた。

息つき島へわたしが行ったのは十月だが、同じ年の四月には角館へも行っている。ことほどさように、わたしの源内ぼっこ（志度では源内に夢中な者のことを源内ぼっこという）は進行していた。源内の角館到着とその後のことはあとのことにして、まずわたしの角館行きについて書きつけておきたい。角館の古い旅館は小林旅館という。この名は新宿のFという居酒屋のセッちゃんという女の子におそわった。というのもこの居酒屋で、わたしは角館という地の名を口にしたらしい。と、セッちゃんは「なつかしいわぁー」と反応した。セッちゃんは生れたのは別らしいが角館で育

ち、角館の小中学校にも通ったという。「角館ならきつと小林旅館に泊るんでしょうねー」と、セツちゃんは夢見るように発音した。

わたしはあと二人、角館に縁ある人を思い出すことができた。一人は旧知の美術雑誌編集者の太田三吉氏で、この人は角館町出身、その兄にあたる桃介氏は、今も角館に住む秋田蘭画の研究家だった。わたしは三吉氏に兄桃介氏への紹介を頼むことにした。三吉氏は学徒出陣組で、もと海軍中尉か大尉、酒を愛し、その言語に東北訛の若干を残す性温厚快活な人である。ある夜、やはり新宿の酒房Bの二階で、三吉氏は一枚の紙の上に角館町の地図を書いてくれ、ここが駅、これをまっすぐ北へ向い、左に折れると兄の家、左に折れずになおまっすぐ行けば小林旅館、そこを右に折れてしばらく行くと旧武家屋敷と説明してくれた。小林旅館のあたりは町家まちやだったらしい。武家屋敷の先からは雄物川の支流である檜木内川ひのきないが流れ、その両側に二軒にわたって桜のトンネルがある。わたしはその桜の満開の時期、四月三十日に角館に行くことにした。この三十日という日はっきりと覚えているのは、泊った翌朝の宿のテレビで、秋田のメーデーのニュースを見ているからである。

わたしがもう一人思い出したのは、父の亡友の娘さんで、安岡せい子さんというひとだった。このひとが角館辺に住むと聞いていたが、やはりそうで、婦人警官として角館に数年前からいることがわかった。わたしは安岡さんにも手紙を書いた。わたしはもとより警察のお世話になったことも

ないし、これからもなろうとは思わない。警察というものがなくなる状態をのぞんでいる者の一人である。だが、この場合は別である。わたしは学生の頃、やはり秋田に行つて、安岡さんの父君にも、お下げ髪のせい子さんにも会っている。

わたしはこうして上野を夜おそく発つて、お昼少し前、源内の縁で数年夢見つづけていた角館の駅に下り立った。桜の満開の季節だというのに、空気はひんやりして、肌寒いくらいである。わたしは太田三吉氏に言われたとおり、駅前のタクシーをひろつて小林旅館の名を告げた。

小柄な五十がらみの番頭はいやに腰が低かったが、あきらかに三等くらいの、床のかなり軋む部屋にわたしを案内した。わたしは夜汽車で疲れていたので、まず炬燵にもぐりこみ足をのばした。赤い縮緬の布切れのかかった小さな鏡台なんかがある。一刻おいてわたしは番頭を呼び、角館警察の安岡婦警に電話したいと言った。と、どうぞどうぞということで、一階上の二等くらいの部屋に部屋がえとなった。そこでわたしは面白くなり、太田桃介さんにも会わなければ、と大きな声でひとりごとを言った。と、番頭は何やら呟くと階下へ下りて行き、しばらくして上ってくると、わたしの荷物をそそくさと持ち、また廊下をひとつまわつて、この旅館では一等と目してよい座敷へとわたしを移した。そこには虎の絵の掛軸などもあり、キョウソクなども、座蒲団の側にうやうやしく置いてあった。

さて、このあたりで源内の角館について書かねばならない。

平賀源内、吉田理兵衛の二人が角館で泊った宿が、どこであるかは不詳である。これがもし小林旅館の先祖の経営した宿であったとしたら都合がよいのだが、そうは行かない。ともかく源内の一行は旅宿へ入った。すると座敷に一枚の絵があり、それが何を描いたものかいまは不詳だが、源内はなちまちその絵に興味をもった。宿の者呼んでどこ誰が描いたのかと尋ねると、角館支藩の若い武士であるという。名は小田野直武である。直武はまもなくその宿へやってきた。源内はそこで鏡餅（七月に鏡餅があるのはこの地方の祭の関係らしい）を上から見たところをスケッチさせ、そこでオランダ風の立体描写の技法を伝授した。いわゆる秋田蘭画はこの時にはじまったといひ。江戸には宗紫石がいたはずであるが、司馬江漢もまだ洋風画にとり組んではいなかった。

わたしは西洋の文学を学び、また父も、祖父たちも、みな秋田である。わたし自身は源内の生れた志度の対岸のあたりで生れ育った。こうして、この角館の一日について、いやでも空想を逞しくせざるを得ない。

源内は軽薄才子、とかくの噂の人であり、小田野直武もそれから六、七年後、源内の牢死の直後、藩主義敦から郷里角館での謹慎を命じられ、一年後、三十歳をこえてまもない年で死を迎えている。角館の一日から数年後に、鏡餅を描いたほうも描かせたほうも死んでいる。

しかしわたしとしては、この二人の才氣の人に好感を抱かざるを得ないし、この二人の名誉回復をいくらかでも計らないわけには行かない。

源内は一年たらず秋田の銅山、銀山を巡察し、調査研究して、銀絞法なども伝授し、秋田藩にたちまち百万兩の利益を得させたという。源内は江戸へ戻った。それを追うように、小田野直武も佐竹藩江戸藩邸詰の銅山方吟味役としてはじめて江戸へ向った。これには藩主の義敦の力があずかって大きい。義敦は別号、曙山といい、この人も絵をよくし、小田野直武は源内から受けた長崎仕込みの洋風画技法をただちに義敦に伝えたとき、また義敦はそれより以前、すでに江戸で宗紫石に学んだともされている。ともかく二百年前の秋田で、藩主の義敦と、角館支藩の若い、しかも高い身分ではなかった直武の二人が（二人は二十五、六でほぼ同年である）前衛美術運動をはじめたと言えるのである。

当時は狩野派が主流であって、浮世絵を描くことさえ武士にとっては好ましいことではなかった。その空気の中で、義敦、直武の二人は、なおも数名の絵どころある藩士とともに、洋風画の研究実作にとりかかる。義敦は、一時は参勤交代をも拒んだほど幕府に反感としか言いようのない感情をもっている。病身で青白いするどい神経をもった藩主だった。

この義敦が、銅山方吟味役というお役目は表向きで、もっぱら洋風画の研究にいそしませるた